

研究発表

『山の音』における「切り」と「合わせ」のテーマ

“Cutting” and “joining” in *The Sound of the Mountain*

鶴田欣也*

Abstract

In *The Sound of the Mountain* there are a good number of scenes where things are being cut. Earlier in the work Shingo observes a fishmonger cut up weeks and put back their meat into the shells. Shingo wonders to himself if the diced meat will go back into the original shells. In the end Yasuko tells her husband a story of a man having his own ear sewed back after having lost it in a traffic accident. The cut up welks and the sewed ear seem to have little common but they show the direction for which this work is heading; it is from “cutting” to “joining”. I have divided the novel into three parts in order to observe the theme of “cutting and joining”. In the first part nature’s cutting” forces such as storms and aging are at work. Shingo passively stands terrified in front of this “cutting” develops into a more dramatic and “artificial” force, and reaches its climax in Kikuko’s abortion. On the other hand “joining” takes a form of Eiko and Kikuko putting on a noh-mask and this art joining man stresses

※ Tsuruta. Kinya [現職] ブリテッシュコロンビア大学教授

a positive aspect of life and love in contrast to the negative cutting.

In the last part Shingo who has been a passive observer emerges as an active "cutter". He negotiates Fusako's divorce (cutting), Kinu's separation from Shuichi, cuts Yatsude and mosquitos in his dream and finally makes a preparation to cut off Kikuko from him. One reason for this is that he has achieved his "joining" with Kikuko in his dream. Further more in the and Shingo is now ready to identify himself with a falling trout in a haiker, thus he has "joined" nature. Now he is out of his initial terror when he heard the sound of the mountain which was the sound of nature's "cutting". By "joining" nature, a fear of "cutting" had disappeared.

何気なく描かれている日常茶飯のこと、小さな自然のたたずまい、短い挿話等に重要な象徴やテーマが隠されていることが川端作品にはしばしばある。特に『山の音』にはその傾向が著しい。

この作品で気にかかっていた一つの文章があった。「山の音」の章に出てくるさざえのシーンである。魚屋の店先で魚屋がさざえを殻から出してきざんでいるのを信吾は見ている。魚屋は無造作に切った身を貝殻の中に入れていたのだが、

三つの貝の身が入りまざって、それぞれの身が元通りの貝殻にはかえらないのだろうと、信吾は妙に細いことに気がついた。

たしかに「妙に細いこと」にちがいない。しかし、この場面は妙に細いこと

で済んでしまうものなのだろうかという疑問が私には残っていた。

「山の音」は最初の章であるが、最近、またこの作品を読み直す機会があって、最後の章、「秋の魚」で次のような文章に気がついた。

アメリカの話ですがね、ニューヨーク州のバッファロオというところでね、バッファロオ……。一人の男が自動車事故で、左の耳を落としてね。医者へ行ったんです。医者はいきなり表へ飛び出して、現場に駆けつけて、血まみれの耳をさがして、拾って帰ると、その耳を傷あとにくっつけたんですって。その後今まで、工合よくついでるさうですよ。

きざまれたさざえと落ちた耳には、一見、何のつながりも見当らない。しかし、第1章の信吾の疑問、「元通り」になるだろうかに最終章の挿話で「工合よくついでる」と一種の答が出ている。切られてバラバラになったものが元通りついたのである。

考えてみるとさざえと耳の間には、いくつもの切られたものが出てくる。蟬の羽、ひまわり、桜の小枝、八つ手、蚊のかたまり、等である。いったいこの「切り」はこの作品の中でどのような意味を持たされているのであろう。「切り」の意味を探っているうちに、その反対の思考「工合よくついでる」、すなわち「合わせ」に行き当たり、発展させてみたのが「離合」のテーマである。

近代小説のほとんどがそうであるように『山の音』は人間の疎外を主題にしている。主人公信吾の目を通して見る登場人物は、それぞれの疎外を背負っている。戦地で心の傷を負って帰ってきた修一はその傷をいやすためか、妻以外の女のところにいりびたっている。房子は離縁されて実家に帰ってきている。英子^{エイコ}は「忘れられない人」を戦争で失っている。菊子は修一をどこかでおそれている。というふうに入々はバラバラに離れた状態で暮している。修一は絹子との生活を振り返ってみて、

しかし別れてみると、今までも絹子は絹子で勝手に生きていたんだと思えて来るんです。

と信吾に述懐している。

人間同志の「切れ」は信吾の場合、かなりはっきりしている。若き日の信吾が憧れたひとは保子の美しき姉であった。その姉は若くして信州で死ぬが、信吾は彼女のイメージを胸に秘めながら、保子と結婚し、房子、修一を育て上げ、62才の今日に至る。美しき姉との離別は信吾の中に大きな傷となっており、それは彼の周囲の人々にも色々な型の波紋をえがいて影響していく。信吾が姉を思いつづけるかぎり、誰とも理想的な人間関係を持つ可能性がないわけである。信吾は他の人間と「切れ」ることで、美しき姉とつながっているといえる。

信吾と美しき姉との結びつきは彼がことあるたびに彼女を想い起すことでも分るが、彼の「向う側の世界」にたいする興味でもそれが分る。山の音の聞こえた夜、彼は裏山の頂上の木々のあいだから星がいくつか透けて見えたことを心にとめていたらしく、その後、庭の萩の間にあげは蝶の飛んでいるのを見て、萩の向うに「なにか小さい世界」があるかのように思い、同時に透けて見えた星の世界のことも思い出すのである。信吾には美しき理想の世界と耐えるべき現実の世界の相克があり、それが信吾の現実離れを助けることにもなっている。

信吾がこの世から少しずつ切り離されていく原因のもう一つは彼自身の老衰である。言葉を換えていえば時間の流れである。この作品は主人公が女中の名前を思い出そうとしてあせっているシーンから始まる。幸四郎の弁慶を幾度見たかと保子に聞かれて、信吾はただ「忘れた。」と答えるだけである。皮肉なことには、現実のことを忘れても、美しき姉の記憶は薄れるどころか、増々、冴えてくるのである。

老衰に伴うこの世との「切れ」は記憶喪失だけではない。信吾の聴覚もかなり衰えてきている。菊子が「お父さま、西瓜西瓜」と呼んでも聞えないし、保子が「萩がきれいに咲いてました。」といっても聞えない。しかし、またも皮肉なことに普通の人に聞えそうもない山が鳴る音が聞えるのである。これは死の告知であり、死はもちろん究極的な「切れ」を意味する。

ゆるやかな時の流れの終点がこの世との別れであるのだが、その間、自然にも嵐のような現象があって、公孫樹や桜の葉を切り落したり、ひまわりの人の首のような花を吹き切ったり、お宮の御與小屋の屋根を吹き飛ばしたりする。

このように時の流れとか自然の力の「切り」がある反面、人工の「切り」もある。信吾の家の近所に大きなひまわりが咲いている。信吾は「大きい花だねえ。実に立派だ。」といって感心するのだが、その家の女の子は「花を一つだけにしたんです。」と説明する。これは他の花を全部切ってしまったので、この一つの花だけが立派になったという意味で、そこに特に複雑な意味は含まれてはいないが、このテーマは後の「春の鐘」の章で信吾が煙草屋の主人と山椿の話をするときに、繰返される。山椿の木はたくさん花がつくが、いいところわづかしに残さないのだと主人は説明する。この「切り」は美の創造のための「切り」である。川端はこのテーマを『禽獣』の中で純粹種の創造という型で展開して見せたが、美の讃歌に伴う非情の一面でもある。

美を非情に追求する際に出る犠牲一すなわち、切りとられた花一が里子ではないだろうか。信吾は保子と結婚するのだが、ひそかに生れてくる自分の娘が美しき姉の再来であることを願った。が、娘の房子は醜かった。信吾は美男の修一だけを可愛がり房子を可愛がらずに育てたため、性質に素直でないところがあった。信吾の「切り」である。信吾は執拗に房子の娘が美しく生れることを希ったのだが、生れた里子は房子よりも醜い。信吾は再度の失望を味い、里子を嫌うのである。だから里子は信吾の美の追求の過程における「切り」捨ての象徴だともいえる。この切り捨てられた里子が「切り」が好きなのは作者が意図しなかった信吾への房子の復讐だろうか。

里子もしんねりといこちで、大人が負けて油蟬の羽根を切っても、まだぐづついてゐた。羽根を切らせたばかりの蟬を、そっとかくすような素振りや、暗い目つきで、庭に投げ捨てたりした。大人が見ていることを知っているのだ。

川端は美の描写で知られているが、この種の醜さの描写は他の追従を許さない、確かな筆致である。里子の「切り」は蟬だけではなく、踊り子の着物を欲しがって、少女の袖につかみかかっていったため、少女が車に轢かれそうになった事件もある。また、信吾の大切にしていた桜の芽も「むしり取っ」てしまうのである。この作品では桜は菊子と密接な関係を持たされているので、里子による桜の「切り」は意味深い。信吾の最初の「切り」の因果であり、信吾が最終的には自分から菊子を切り離さなければならないことの前触れでもあろう。

いままで見てきた「切り」は多少の例外を除いて「山の音」、「蟬の羽」、「雲の炎」、「栗の実」の最初の四章から拾ってみたものである。この「切り」の特徴の一つは老衰、嵐を含めて、自然の力の一部であることである。人工の「切り」もあるが、せっかく花を間引いて、大きくしたのに嵐によって吹き切られてしまうひまわりの例もある。それに信吾自身のよる直接の「切り」はない。里子の「切り」は12章「傷の後」にならないとその意味が分らない仕組みになっている。もう一つの特色は「合わせ」がまだはっきりとした形で現れていないことである。最初の夢でたつみ屋の娘とおぼしき若い女に触れるのが唯一の例だが、それも、

……ゆるい感覚だけだ。からだは合はなくて、答へがなかった。まがぬけてゐた。

ということで、むしろ「合はな」いことが強調されている。

それでは「切り」や「合わせ」にどんな変化が出てくるか、この作品の発展部の章をいくつか観察してみよう。「島の夢」、「冬の桜」、「朝の水」、「夜の声」、「春の鐘」、「鳥の家」という6章をとることにする。

発展部では導入部に比べ「切り」が色々な意味で進んでいるようだ。蟬の羽を切ってほしいとだだをこねていた里子が他の女の子の着物をはぎとろうとしたり、信吾が芸者に「なに？ 耳が遠くて、聞えないよ。」と腹立たしくいったりする。また大晦日に房子が里に帰されてくるが、信吾は「まあいいさ、

切れ目がはっきりしてゐて。」といい、房子と相原の関係がはっきりと切れたことを認める。

しかし、発展部の「切り」で一番劇的な「切り」は墮胎であろう。信吾は「夜の声」で少女が墮胎して聖少女となった夢を見る。その後すぐ菊子に友人から手紙で子供をおろしたといってくる。これは先触れの役目を与えられており、2章後の「鳥の家」で信吾は修一から菊子が墮胎したことを告げられるのである。

「切り」というよりは「切れ」といったほうがいいかもしれない出産がある。母体から離れて一つの独立した生命を与えられるのであるから出産も「切れ」の一つと考えていいだろう。実際、この世の疎外感、孤独というのは出産から始まるのだ。ここではテルが数匹の仔犬を産む、近所のひとが「こんどテルがお宅へ来て産んだから、お宅でも産れますよ。」という。が、菊子は赤ん坊を産まずに墮胎という「切り」を実行したのである。

しかし、出産の持つ意味は「切り」ばかりではなく「合わせ」の意味も持たされている。出産によって代が続くのである。「鳥の家」では毎年帰ってくる「うちの鳶」が実は同じ鳥ではなくて、代変りした鳶、すなわち、子供の鳶ではないかということに突然信吾は思い付くのである。このシーンは『山の音』でも信吾が自然のサイクルを次第に受け入れていく重要な転機になっているのだが、「切り」のテーマでも、やはり、かなり大切なポイントである。というのは、出産には「切り」と「合わせ」という二つの部分によって、均衡が保たれていることが示され、「切り」もなかなか一筋縄でないことがここで判明する。

発展部ではかなりはっきりした形の「合わせ」が出現する。その一つは人工（芸術）と自然の合せである。極楽死を遂げた水田の遺品である能面を二つ信吾は買われる。一つは慈童、もう一つは喝食である。永遠の象徴である慈童面を会社の英子^{エイコ}の顔にかけさせる。彼女が面を静かに動かすのを見ながら、信吾は面が生きて来たと思うのである。生きている人間が死んでいる芸

術品に生命を吹きこんだことになる。

「合わせ」はこの反対にも働く。仔犬が盛山からころがり落ちたのを見て、信吾は宗達の絵を思い出し、感激する。芸術が自然の観賞を高めたのである。

また信吾は喝食の能面が写真で誰かに似ているのを思い出したりするのだ。このような芸術と自然との組合せは「春の鐘」で菊子が慈童の面をかむり、面の裏から信吾に愛の告白一別れても、お父さまのところにゐて、お茶でもしてゆきたいと思ひますわ。一をする前座に過ぎない。美しき姉の霊媒菊子と永遠の象徴慈童の合せが自然—人工の合せのクライマックスである。

「合わせ」は自然—人工のコンビだけではない。人と人との「合せ」もある。修一が絹子のところで酔い、その上、駅前の飲み屋でねばって、帰ってきたのが2時半頃、外から菊子を身も世もあらぬ声で呼ぶ。菊子は泥酔している修一をゆるし、母親のように世話をする。信吾は床の中で一部始終聞いており、夫婦の仲というのはおたがいの悪行を果しなく吸い込んでしまう不気味な沼のようなものだと思う。

発展部では導入部で主に自然の力の一部として解釈される「切り」がかなり発展し、墮胎という劇的な形にまで延長される。房子の離縁、里子の「おべべ」はぎとり、というように老衰、嵐とは性質を異にし、人為的、意志的な「切り」に進んでいる。またこれに、老人夫婦の家出や61才のおじいさんが17の小児麻痺の男の子を殺す事件をつけ加えれば、いっそうその点が明確になる。

最初にはほとんど勢力を持っていなかった「合わせ」がここではかなり幅を利かすのである。「切り」が主に疎外、孤独、老衰、死など否定面と密接な関連を持つのに、「合わせ」は、生命感の鼓舞、愛、夫婦間の和というような積極面に働きかけているように見える。しかし、ここで見る「合わせ」はよく見ると積極面の裏に一抹の不安が伴うようである。例えば菊子が面をかむり、愛の告白をするとき、

ひいっと里子の泣声が聞えた。

庭でテルがけたたましく吠えた。

という天からの警鐘が鳴り、信吾は不吉なものを感じ、菊子は修一が女のところからもどったかと聞き耳をたてるのである。この愛には無理があり、「合わせ」はまだ完全ではないのである。その点、人工—自然の「合わせ」も全く自然ともいえないし、修一と菊子の「合わせ」も、しょせんは修一のあまえであり、菊子のゆるしであって、信吾のいうように「沼」である。責任ある大人同志の愛とはほど遠いものといわねばならない。それあらぬか、間もなくすると菊子は修一の子を墮胎するのである。

終結部は「都の苑」、「傷の後」、「雨の中」、「蚊の群」、「蛇の卵」、「秋の魚」の6章とし、「切り」と「合わせ」を分析してみたい。

ここでは「切り」がそれぞれ一応の完結を見せるようである。例えば菊子を半ば象徴する桜は既述の如く、里子によって信吾が大切にしていた小枝を失い、「蛇の卵」では葉を大方落してしまう。これは導入部において見た自然の「切り」が再び帰ってきたことを示すと同時に最後の「菊子、からす瓜がさがって来てるよ。」の先取りで、菊子が信吾から離れて行くことの暗示である。

房子の相原からの「切れ」もここで完結を見る。相原が他の女と心中を計ったからである。房子は相原のことが出ている新聞を象徴的にびりびりと手をふるわせて引きさく。信吾は離婚届を出して、彼等の「切れ」を正式なものにする行為者になる。

導入部や発展部では信吾は「切り」に関しては行為者ではなく、老衰とか自然の嵐、もしくは他者からの「切り」を受ける側に立っていたが、終結部では彼が能動的に「切り」を実行する者として現われる。新宿御苑での菊子とのランデブウで、信吾は枇杷の木が邪魔ものがないため、思い切り育っているのを見て感激する。それからの連想で自分の庭の桜の根元の八つ手を取ってやろうと思う。実際、次の日曜日に信吾は修一に手つだってもらい、八つ手を鋸で切ってしまう。

「蚊の群」では信吾は絹子に直接会い、墮胎をすすめる。絹子はそれを拒絶するが、彼女は、

「お宅のお世話にならなければ、よろしいんでせう。絶対に泣きつかないって、私誓ひますわ。修一さんと別れましたし。」

と子供を「切る」ことを拒否するかわりに、修一を「切る」ことを約束する。信吾は小切手を出すと、彼女は「さう？手切金でわけね。……」といって受けとり、彼女と修一の「切れ」が完結する。房子のときと同様、ここでも信吾が「切り」を押し進める能動者である。

信吾はこの後、夢を見る。木こりと夜道を歩いていって、最後は信州の田舎の家につき、保子の美しい姉も見えるという夢である。夢の中では信吾は若い陸軍の将校で腰に日本刀をさげ、ピストルを三挺もつけている。道の途中で杉の木が2、3本重なっているように見える蚊のかたまりを日本刀で切って切って切りまくる。夢でも信吾は「切り」の能動者である。次章の「蛇の卵」で既述の桜の葉が落ち、そして最終章「秋の魚」で信吾は菊子に「菊子、別居しなさい。」といい、菊子を自分から切り離し、独立させる極めて重要な第一歩を踏み出すのである。

導入部及び発展部では「切り」は主に人生の否定面と密接な関連を持っていたが、終結部ではむしろ、「切り」は房子、絹子、菊子の生活にとって、積極的な面も持たされている。相原から切れて、房子は新しい生活に向うことができるし、手切金という「切れ」は絹子の新しい洋裁店の土台になった筈である。そして、信吾が菊子を切り離し、独立させる意図の背後には信吾の大きな愛情が隠されている。信吾は菊子の愛を不当に利用することもできた。しかし、彼女にたいするより深い愛が彼女を彼から切り離し、新しい修一との生活の方角に押しやったのである。「切り」は疎外や死から離れ、ここに新しい意味を持たされたのである。

「切り」にこのような新しい意味が終結部で展開したのだが、「合せ」の方はどうであろう。発展部では人工と自然の「合わせ」では一抹の不安があり、

多少の唐突さをまぬかれなかったが、ここではこの種の「合わせ」は全く姿を消しているのが一つの特徴である。それと同時に発展部の「切り」に信吾が登場せず、終結部で彼が積極的に「切り」を行う人物として現われたと同様、ここでは信吾が「合わせ」の主人公になっているのも特徴である。彼の「合わせ」には変化発展が伴っている。まず「都の苑」で彼は菊子とのランデブウをするが、「公孫樹の木を背に、菊子はベンチで待っていた。」は興味深い「合わせ」といわねばならない。公孫樹は桜が菊子との密接なつながりがあるように信吾とのつながりがある。御苑では鐘が鳴り、信吾にはそれが教会の鐘のようで「どこか西洋の公園を通して、教会へ行くかのやうに思」えたのであった。これは信吾の菊子との「合わせ」のファンタシイである。そして、次章の「傷の後」では夢で処女を侵す。若い女は修一の友人の妹のようであったが、信吾は突然「あっ。」と稲妻に打たれたように驚く。若い女は菊子の化身であったのだ。御苑で始まった菊子との「合わせ」が夢で完結したわけである。夢で菊子との一体化を全うしたので、現実で信吾は菊子を切り離すことができたともいえる。

以上は人と人との「合わせ」であるが、既述の切られた耳がまた元の通りになる話も終結部に出てくる。また、自然と自然の「合わせ」もある。帰りの電車の中で大きなもみぢの枝をかついで5、6人の男が旅行の帰りかはしゃいでいる。もみぢの紅さ、あざやかさから、信吾は寒い国のものにちがいないと思う。それからの連想で、「信州のもみぢも、もうきれいだらうな。」と修一にいう。この電車の中で信吾は長い間帰ったことのなかった信州へもみぢを見に帰ろうと修一に提案する。ここでは越後のもみぢから信州のもみぢに重なる極く素直で簡単な「合わせ」である。ここには発展部にあった巧まれた「合わせ」はない。

最終章「秋の魚」で信吾、修一、房子の3家族が食卓を囲んでいる。鮎が3匹でる。鮎から、信吾は、

今は身を水にまかすや秋の鮎

という昔の句を引き出し、自分を鮎にたとえて、「どうやら、わたしのこころしい。」とっている。導入部では信吾は無意識に自分を公孫樹と比較していた。公孫樹は老木にもかかわらず、嵐に葉を落されても、奇蹟的に若葉を出した。であるからこの信吾の自然との「合わせ」は自然な自然ではなくて、時間に逆行する異形の自然との「合わせ」であった。「身を水にまかす」は自然とその中に脈打っている時間に身をまかすことであり、奇蹟を追い求めている姿勢とはかなり違ってきている。素直であり、自然である。一種の諦観さえ見られる。そのためか、前にあった一抹の不安は全く拭いさられている。このように終結部では信吾は先ず人と人との「合わせ」を完結し、それから自然との「合わせ」に移り、しかもそれは自然を制御しようとするものではなく、それに従い、溶合するものである。

『山の音』という作品を「切り」「合わせ」というテーマを基軸に沿って見ていくと、いくつかのことが明らかになる。最初、信吾は自然の「切り」の力の前に恐れおののいている人間であり、なんとか、自分の個を自然の破かい力から守ろうとする受け身の老人である。そしてここには「合わせ」の勢力は見られない。信吾は次第に否定的な「切り」の勢力が進み、墮胎にまで発展するのを見るが、同時に「合わせ」の勢力も現われ、自然と人工を結びつけて、生命感を強調する。人は人にあまえ、またゆるすのであるが、真の愛の「合わせ」にまでは至らない。作品が終りに向うと、「切り」「合わせ」の様相は一変する。切られた人達は「切り」が完結し、そのため、新しい生活を迎える状態に入るのである。しかも、この「切り」を積極的に進めるのが、受動的であった信吾である。彼は否定面の濃かった「切り」を菊子に行うことで、この行為を単なる性欲を越えた人間愛にまで高めていく。その一つの理由は信吾が夢の中で性的に菊子と自分を「合わせ」たためである。しかし、信吾は自分を落鮎にたとえることで、自然との素直な溶合を遂げることができる。「切り」と「合わせ」は自然が持つ力であり、出産のテーマに示されたようにしよせんは同じ力なのではないだろうか。

討議要旨

桑川光樹氏から、「切り」と「合わせ」は発想分析の方法としては神話にまで共通する興味深い方法であるが、しかしこれはあらゆる文学の根本であり、一人の作家を分析するキーになり得るか、また象徴的な作品ではその方法は効果を発するが、そうでない場合は、作品論ではなくまた元の作家論に戻ってしまうのではないかとの質問があり、発表者より、あらゆる人間関係に「切り」と「合わせ」があることはたしかであるが『山の音』ではこの「切り」と「合わせ」で作者の芸術意識がうかがえる。また後者の問いへの答えは質問者の前者の質問自体に答えが宿っていると思うとの返答があった。

小林一郎氏から、「切り」「合わせ」のテーマというのは一般的発想だが、『山の音』には例えば仏教的なものや『源氏物語』の影響といった川端独自のものがあるのではないかとの質問があり、発表者より、自分は作品分析の際、仏教、キリスト教、神道といった漠とした言葉は使用しないことにしている。質問者の意図は理解できるが、その点にすべて作品の要素を還元してしまったのではおもしろくなくなるとの返答があった。